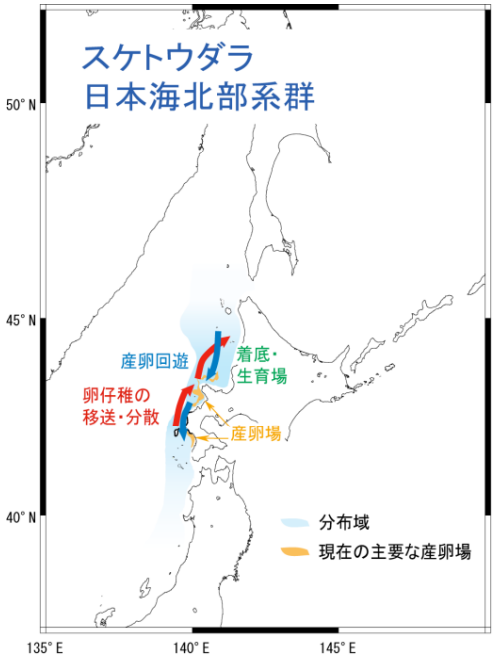
スケトウダラ日本海北部系群－①

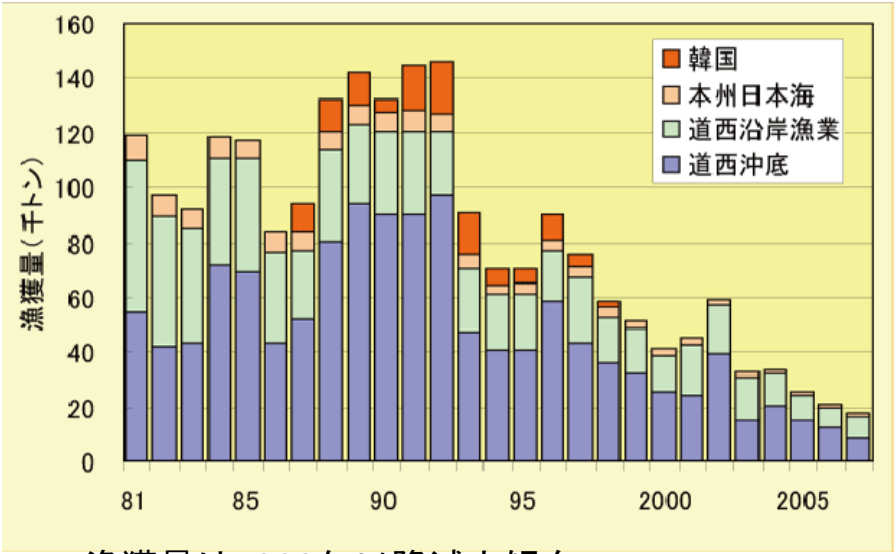
資料2

スケトウダラ日本海北部系群

スケトウダラ日本海北部系群の生活史と漁場形成模式図



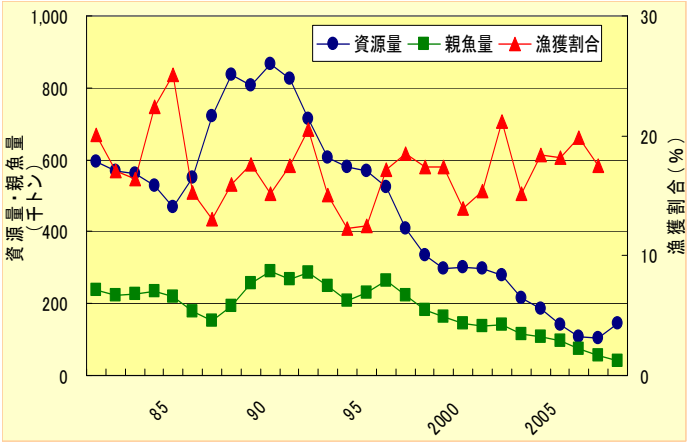
漁獲量の推移



・漁獲量は1993年以降減少傾向
・2007年度の漁獲量は18千トン

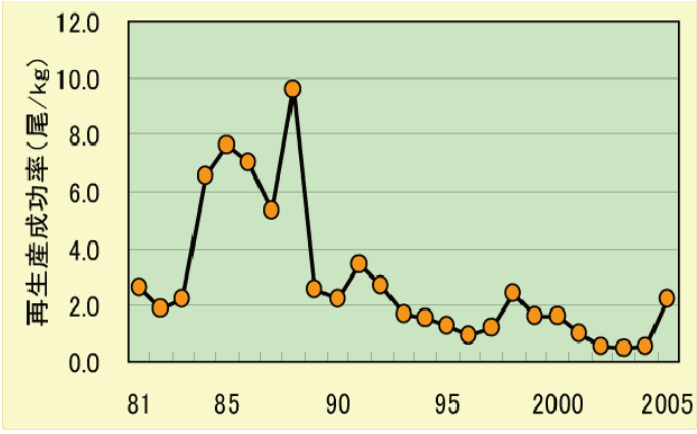
スケトウダラ日本海北部系群－②

資源量、親魚量、漁獲割合



・資源量は1992年以降減少傾向
・2007年度の資源量は103千トン
・親魚量は1990年代以降、減少傾向

再生産関係



・再生産成功率は1989年級群以降低迷
・2005年・2006年級群が近年比較的高い豊度であることが示唆される

資源評価結果

資源水準　低位　　資源動向　減少傾向

・再生産成功率および加入量は、1989年以降、減少傾向を示しているが、2005年・2006年級群については良好であった可能性
・2008年の親魚量（推定値）は42千トンであり、2007年（56千トン）から2割減少し、Blimit（146千トン）を大きく下回っており、回復・維持のための措置が必要

漁獲シナリオ（管理基準）	2009年漁獲量（千トン）	評価			
		10年後にBlimitへ回復する確率	20年後にBlimitへ回復する確率	30年後にBlimitへ回復する確率	10年後の親魚量が3万トンを下回る確率
ABClimit					
①親魚量の増大(10年でBlimitへ回復)(Frec10)	1.8	52.5%	97.4%	99.9%	0.0%
②親魚量の増大(B/Blimit×Fsus)(Frec)	3.1	0.3%	11.4%	26.9%	0.0%
③親魚量の増大(20年でBlimitへ回復)(Frec20)	5.9	4.3%	48.1%	79.8%	0.0%
④親魚量の増大(30年でBlimitへ回復)(Frec30)	7.4	0.8%	19.5%	46.8%	0.0%
*⑤親魚量の増大(わずかでも親魚量を増大)(0.9Fsus)	9.3	0.0%	2.3%	8.4%	0.0%
*⑥親魚量の維持(Fsus)	10.3	0.0%	0.7%	2.5%	0.0%
参考値					
漁獲圧の半減(0.5Fcurrent)	12.7	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
漁獲圧の維持(Fcurrent)	24.1	0.0%	0.0%	0.0%	72.1%

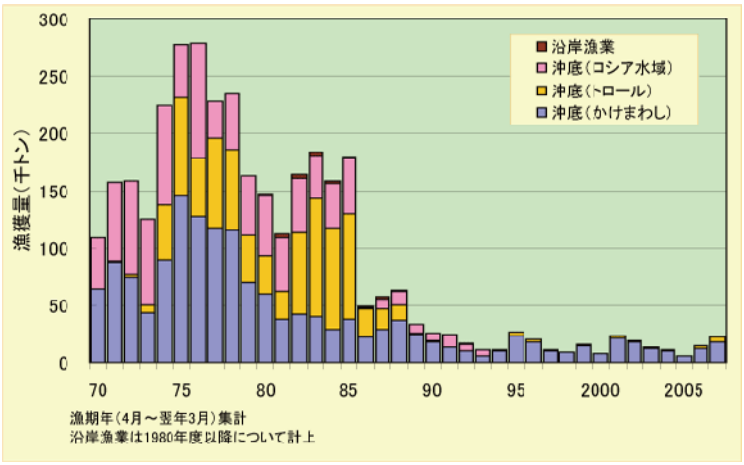
※中期的管理方針では、「資源回復計画に基づき資源の減少に歯止めを掛けることを目指して管理を行う」こととされており、＊のついた漁獲シナリオがこれに合致する

スケトウダラオホーツク海南部

スケトウダラオホーツク海南部

スケトウダラオホーツク海南部の分布図

漁獲量の推移



・2007年度の漁獲量は前年度を8千トン上回る23千トン

資源評価結果

資源水準　低位　　資源動向　増加傾向

・隣接するロシア水域での漁獲状況が不明で、評価が困難
・日本水域の状況から、資源は低水準、動向は増加傾向と判断
・ロシア水域では2005年級群が高豊度との情報がある

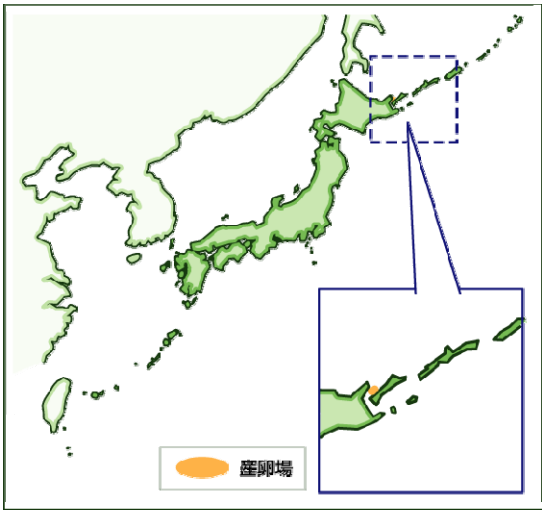
漁獲シナリオ（管理基準）	2009年漁獲量（千トン）	評価	
		5年間Blimitを維持する確率	10年間Blimitを維持する確率
―	―	―	―

・当資源は、ロシア水域等他水域との交流があり、詳細な生態や資源情況が不明なことから、2009年漁獲量の算定及び評価は行っていない。
・なお、参考値として試算した2009年漁獲量は、0.8Cave5-yr（漁獲圧を低減し、資源増大を図る）が10.7千トン、Cave5-yr（漁獲圧の維持)が13.4千トンである。
・中期的管理方針では「ロシア共和国連邦の水域と我が国の水域にまたがって分布し、同国漁船によっても採捕が行われていて我が国のみの管理では限界があることから、同国との協調した管理に向けて取り組みつつ、当面は資源を減少させないようにすることを基本に、我が国水域への来遊量の年変動にも配慮しながら、管理を行う」とされている。

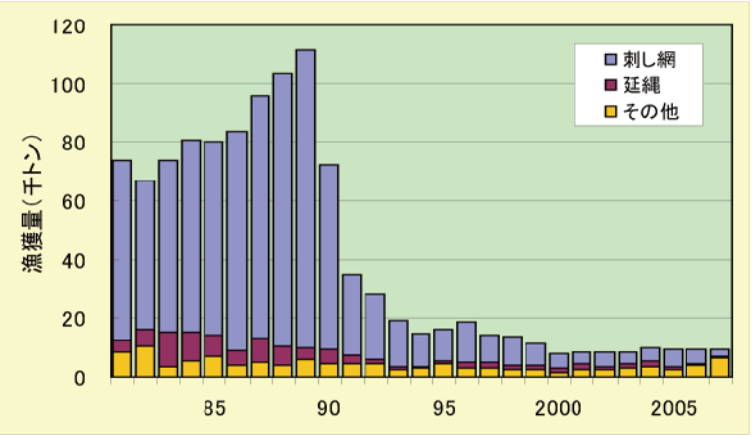
スケトウダラ根室海峡

スケトウダラ根室海峡

スケトウダラ根室海峡の分布図



漁獲量の推移



・2007年度の漁獲量は前年並の9千トン

資源評価結果

資源水準　低位　　資源動向　減少傾向

・漁獲量はピーク時の1割以下で低迷しており、資源水準は低い
・漁獲物年齢組成から、加入の悪化が示唆される
・ロシア水域では2005年級群が高豊度、TACが増加傾向との情報がある

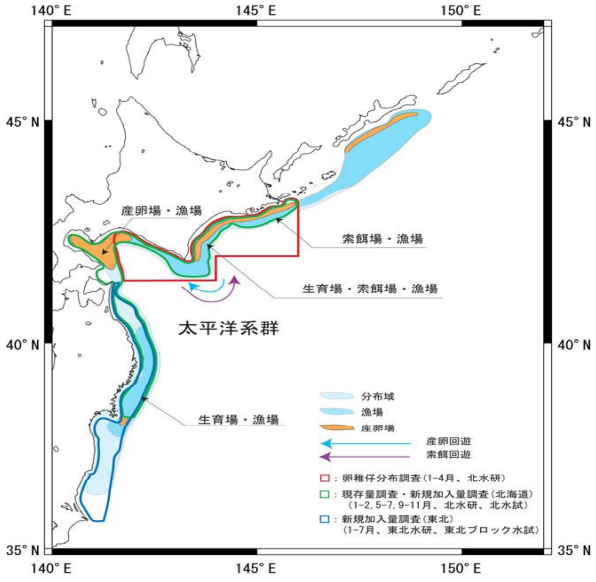
漁獲シナリオ（管理基準）	2009年漁獲量（千トン）	評価	
		5年間Blimitを維持する確率	10年間Blimitを維持する確率
―	―	―	―

※当資源は、北方4島水域等との交流があり、詳細な生態や資源情況が不明なことから、2009年漁獲量の算定及び評価は行っていない
※なお、参考値として試算した2009年漁獲量は、0.6Cave5-yr（漁獲圧を低減し、資源減少を止める）が5.6千トン、Cave5-yr（漁獲量の維持）が9.3千トンである。
※中期的管理方針では、「ロシア共和国連邦の水域と我が国の水域にまたがって分布し、同国漁船によっても採捕が行われていて我が国のみの管理では限界があることから、同国との協調した管理に向けて取り組みつつ、当面は資源を減少させないようにすることを基本に、我が国水域への来遊量の年変動にも配慮しながら、管理を行う」とされている

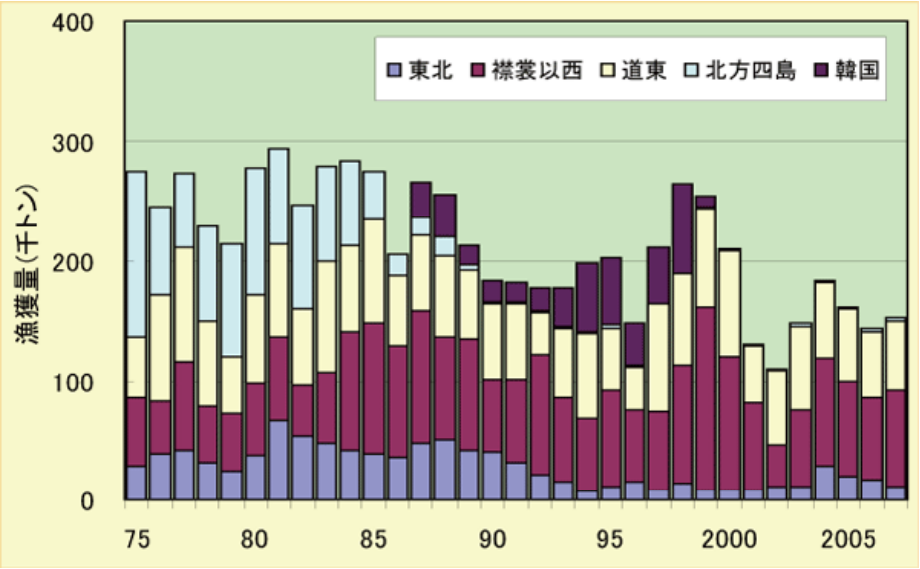
スケトウダラ太平洋系群－①

スケトウダラ太平洋系群

スケトウダラ太平洋系群の生活史と漁場形成模式図



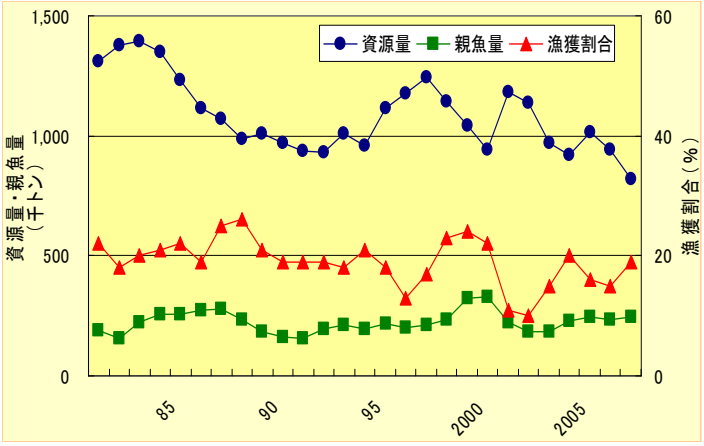
漁獲量の推移



・2007年度の漁獲量は152千トン

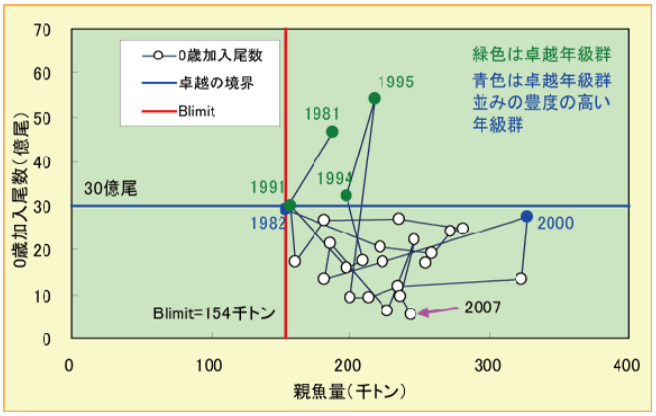
スケトウダラ太平洋系群－②

資源量、親魚量、漁獲割合



・資源量は1981年度以降比較的安定して推移しているが、2002年度以降は減少傾向にあり、2007年度の資源量は過去最低の821千トン
・親魚量は安定的に推移している。

再生産関係



・加入量は1981年度以降激しく変動
・1981、1991、1994及び1995年級群は加入量が30億尾以上の卓越年級群、1982、2000年級群は豊度の高い年級群と考えられる
・近年は卓越年級群の発生がみられていない

資源評価結果

資源水準　低位　　資源動向　減少傾向

・資源量は主に卓越年級群や豊度の高い年級群が発生した後に増加
・再生産成功率は1996年度以降低い値で推移
・2008年の親魚量（推定値）は24万トンであり、Blimitより高い値（Blimit=1982年級群を産んだ親魚量の水準の15.4万トン）
・資源は減少傾向にあるものの親魚量は安定的に推移

漁獲シナリオ（管理基準）	2009年漁獲量（千トン）	評価	
		5年間Blimitを維持する確率	10年間Blimitを維持する確率
ABClimit ＊① 資源量の増大(Fmed)	92	100%	98%
＊② 現状の親魚量の維持(Fsus)	117	70%	51%
＊③ 現状の漁獲圧を低減しBlimitの維持を図る(F29%SPR)	122	52%	36%
参考値 現状の漁獲圧の維持(Fcurrent)	133	27%	11%

※中期的管理方針では、「資源の回復を基本方向としつつも、回復のための措置が関係漁業者の経営に大きな影響をあたえる場合には資源水準を維持する等回復のスピードに十分配慮して、管理を行う」とされており、＊のついて漁獲シナリオがこれに合致する